子どもの自主・自立性に関わる暗闇体験

本間玖美子

The effects of dark experiences on children's independence

Kumiko Homma

abstract

The aim of this study is to clarify the correlation of children's feelings of life enrichment and independence with any dark experiences they may encounter.

A total of 1393 students of both genders were randomly selected for the survey from fourth, fifth, and sixth graders in Tokyo elementary schools. Data was collected from two series of questions : 1) dark experiences (ten questions, four-point rating scale) and 2) their life enrichment and independence feelings (ten questions, five-point rating scale).

Of the three grades, the fourth grade students had the highest number of dark experiences as well as the best feelings in their daily lives. The factor-analysis revealed four factors, which were "dark experiences from outside," "dark experiences from inside the house," "factors of life enrichment feelings," and "factors of a child's independence." According to the SEM model (with the four factors), the effects of dark experiences on children's independence indicated approximately a 26% rate of variance of the final dependent factor, i.e., children's independence.

Therefore, these results suggest that dark experiences could affect a child's independence.

Key words : elementary school students, life enrichment feelings, natural experiences

小学生, 生活充実感, 自然体験

I 緒 言

子どもは本来, 日常生活の中で様々な事に好奇心を持ち, 自ら意欲的, 積極的に行動しようとする可能性を持っている. 筆者は子どもの自主・自立性は, 日常生活の中で, 自ら意欲的積極的に行動ができることであると捉えている. この自主・自立性を養成する要因の1つに自然体験があると考え, 他の要因も含めた一連の調査研究を継続してきた.

仙田(1999)によれば, 日常生活の中での自然との関わりが減少し, 子どもを取り巻く環境が大きく変化してきたという. 自然環境の狭隘化とそ

れに伴う生活実感の希薄化は, 子どもの日常生活に影響を与える. このことは, 千野ほか(1989)によれば, 自然体験度の高い子どもは担任教師から感受性が高いという評価を得ているとされており, 本間・塩嶋(2004)によれば, 子どもの自然体験が社会生活能力に少なからず影響をおよぼすことが示されている. さらに本間ほか(2007)では, 子どもの自然体験, 遊びの要因は少なからず自立性に影響を及ぼすことが報告されている.

本間・塩嶋(2003)による自然体験調査の結果, 身近な生活の中において, 汚い, 汚れる, 臭い, 臭う, などの触覚, 嗅覚, 視覚, 味覚, 聴覚など感覚器による体験が少ないことがわかった. この

感覚的体験、特に視覚における体験では、都市生活の中での24時間化が進み生活の利便性は高くなったが、真夜中でも明るい状態であることが多く、生活環境から暗闇が減少したことが1つの原因として挙げられる。

子どもの日常生活における自主・自立性と関連する意欲や生活充実感、自然体験特に暗闇体験という体験要因のみで規定されるわけではない。しかし、仙田(1999)の「暗闇は子どもの想像力をかきたてた」、「子どもにとっての暗闇は明るくないというだけでなく、別の世界の意味をもっていた。妖怪やお化けに通じる世界だった。そのような世界が子どもたちの周りになくなったため、子どもたちの遊びに深さがなくなり、ひいては想像力が欠如しているのではないかと危惧する声もある」との意見もある。

暗闇体験について、心理的暗闇の持つ意味についての大学生を対象とした調査研究から哲学的考察を行った報告が竹中(2005)によってされているが、子どもを対象とした暗闇体験についての明確な仮説を構成するために、直接的に参照できる先行研究は見当たらない。

そこで本研究では、この研究主題に照らして発見的に検討するため、最終的従属変数としての自主・自立性の因子をある程度説明できであろう説明変数を想定しながら、探索的に組み上げた枠組により、構造方程式モデルにまとめた。これによって暗闇体験、子どもの生活充実感が自主・自立性にどの程度関連するかを検証することを目的とした。

II 研究方法

1. 調査対象および調査期間

東京都市部(練馬区・新宿区・港区・江東区・葛飾区・足立区・墨田区・三鷹市)8地域の小学校を対象とし、各学校長の協力を得て、学校長から保護者への承諾を得た。また調査項目の内容が理解できることなど、知的発達段階を考慮して児童期後期の4年生479名、5年生445名、6年生469名の男女児童1393名を対象として質問紙調査を実施した。

2006年10月に各調査校へ調査票を発送し、各

表1 暗闇体験・生活充実感・自主・自立性の調査内容

暗闇体験の項目 (k1~k10)
k1) 夜の墓場などをだれかといっしょに歩いたこと
k2) 森や山の暗闇の中をだれかといっしょに歩いたこと
k3) 森や山の暗闇の中で静けさ(シーン)を感じたこと
k4) 森や山の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと
k5) 「きもだめし」をやったこと
k6) 家の中の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと
k7) 夜ねるときは電気を消し、暗くしてねること
k8) 押入れ、物置(ものおき)蔵(くら)の中で暗闇を体験したこと
k9) ふとんを頭からかぶって暗闇を体験したこと
k10) 真っ暗やみ(家の中や外)でこわい思いをしたこと
生活充実感・自主・自立性の項目 (s1~s10)
s1) 毎日がおもしろく、すぐ夜になると思う。
s2) 今の自分は何でもできると思う。
s3) いつでも友達と仲良くできる。
s4) 将来(しょうらい)の夢をもっている
s5) 毎日の生活が楽しいと思う。
s6) いざとなるとどうしても親・先生・友達をたよってしまう
s7) 親や先生にいわれなくても自分で進んでやることができる
s8) 毎日の生活がたいくつでおもしろくないと思う。
s9) 夢中になれる、うちこめることがある
s10) 自分が正しいと思うことはそのとおりにやる

クラス担任の指導のもと授業時間内に実施することを依頼した。2006年11月中旬までに郵送にて回収した。回収の結果、回答者1374名で有効回答率98.7%であった。その内訳は4年生34%(456名)、5年生32%(441名)、6年生34%(457名)であり、性別は、男児51%(700名)、女児49%(674名)であった。

2. 調査内容

「暗闇体験に関する項目」は筆者の自然体験調査の内容をもとにして筆者が独自に10項目を選定し、「まったくなかった」「たまにあった(1~2回)」「よくあった(3~4回)」「非常によくあった」の4段階評定尺度の形式で実施した。「生活充実感と自主・自立性に関する項目」については、堀ほか(1994)の心理尺度を参考にして10項目を選定し、「今の自分にまったくあてはまらない」「今の自分にあまりあてはまらない」「どちらともいえない」「今の自分にかなり当てはまる」「今の自分に非常によく当てはまる」の5段階評定尺度の形式で実施した。調査内容項目は表1に示すとおりである。

3. 分析方法

1) 上記調査内容の合計20項目の評定尺度を全てプールして全体的因子分析を施した。そのときあとの構造方程式モデル(図1)の作成を考慮して最尤法, 因子間の相関を想定して斜交回転のうちプロマックス回転を用いた。なお, 因子数は初期の固有値でおよその見当をつけ, 解釈可能性に基づき決定した。

全体的因子分析の因子スコアによる男女別, 学年別の分析にあたり, 男女別ではt検定を実施, 学年別では一元配置分散分析を施して群間の全体的有意差を検討し, その後平均値の多重比較検定(Bonferroniの方式による)を行った。

2) 正準相関分析は, 重回帰分析でもよく行われるように, 実際に因果関係を同定することは難しいが, 「暗闇体験に関する項目」(10項目)を説明変数群として, 「生活充実感と自主・自立性に関する項目」(10項目)を目的変数群として, 両者がどの程度の対応・関連がつくかを検討するために行われる検証仮説を構成するためのものである。この解析法の基本は説明変数群と目的(従属)変数群, 両者各々の線形結合を新変数とする時, 説明変数と目的(従属)変数の相関を最大化することである。

これら1), 2)の分析にはSPSS統計解析(ver.15)ソフトを使用した。

3) 構造方程式モデルによる解析は, 因子分析から得られた因子と正準相関分析の結果等を考慮して得られた因子の連関構造と, それらが最終的な従属変数としての子どもたちの自主・自立性の因子へどのように影響しているかを構造的に因果関係として表現した統計モデルである。このモデルの作成には, 因子相関行列も参考にしながら, 仮説を検証する方向での因果関係(矢印の方向)を設定している。この構造方程式モデルによって, 探索的に, 暗闇体験や生活充実感の因子が自主・自立性の因子にどの程度の影響を及ぼしているのかを検討しようとした。

なお, 構造方程式モデルによる解析にはSASの統計ソフト(ver.8.2)を用い, PROC CALISプロシジャにより, 重みなし最小2乗法を実行してから, 最尤法を実行する2段階の推定法を適用した。モデル適合度の適切さの判断は, GFIの大き

さが1に近い値であり, AGFIがGFIより大きく下らないこと, RMSEAが.05以下, RMRも.05以下であることを基準とした。

III 結 果

1. 全ての項目をプールした因子分析の結果

暗闇体験(10項目), 生活充実感と自主・自立性(10項目)の計20項目について因子分析を行った。

表2に示すとおり, 暗闇体験から2因子, 生活充実感と自主・自立性から2因子合計4因子が得られた。これは, 初期の固有値でおよその見当をつけ, 解釈可能性を検討して抽出されている。

第1因子は因子負荷量の大きさから, “森や山の暗闇の中で静けさ(シーン)を感じたこと”, “森や山の暗闇で虫の声, 風の音, 雨の音を聞いたこと”, “森や山の暗闇の中をだれかといっしょに歩いたこと”, “「きもだめし」をやったこと”の5項目が1つのグループを形成しており, 第1因子として「自然の中, 戸外の暗闇体験因子」と解釈された。

第2因子は, “押入れ, 物置(ものおき)蔵(くら)の中で暗闇を体験したこと”, “家の中の暗闇で虫の声, 風の音, 雨の音を聞いたこと”, “ふとんを頭からかぶって暗闇を体験したこと”の3項目の因子負荷量から, 「家の中, 屋内の暗闇体験因子」と解釈された。

第3因子は, “毎日の生活が楽しいと思う”, “毎日の生活がたいくつでおもしろくないと思う(逆転項目)”, “毎日がおもしろく, すぐ夜になると思う”, “いつでも友達と仲良くできる”の4項目の負荷量から「生活充実感の因子」, 第4因子は, “自分が正しいと思うことはそのとおりにやる”, “今の自分は何でもできると思う”, “親や先生にいわれなくても自分で進んでやることができる”, “夢中になれる, うちこめることがある”の4項目の負荷量から「自主, 自立性の因子」といった4つの解釈可能な因子が得られた。

また, 表2の因子寄与(因子分散)をみると, 第1因子がやや大きい, 第2~第4因子はほぼ同じウェイトを示していることがわかる。これは, 他の因子の影響を無視した場合のものである。

表 2 暗闇体験と生活充実感・自主・自立性の因子分析

	因子負荷量			
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
森や山の暗闇の中で静けさ（シーン）を感じたこと	0.802	0.354	-0.003	0.158
森や山の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと	0.776	0.354	0.058	0.170
森や山の暗闇の中をだれかといっしょに歩いたこと	0.728	0.300	-0.007	0.134
「きもだめし」をやったこと	0.427	0.309	0.055	0.131
夜の墓場などをだれかといっしょに歩いたこと	0.416	0.308	-0.014	0.098
押入れ、物置（ものおき）蔵（くら）の中で暗闇を体験したこと	0.354	0.702	0.036	0.093
家の中の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと	0.300	0.456	0.031	0.133
ふとんを頭からかぶって暗闇を体験したこと	0.246	0.672	0.050	0.120
毎日の生活が楽しいと思う	-0.014	0.087	0.818	0.496
毎日の生活がたいくつでおもしろくないと思う	0.027	0.005	-0.702	-0.231
毎日がおもしろく、すぐ夜になると思う	0.086	0.192	0.512	0.378
いつでも友達と仲良くできる	0.102	0.080	0.453	0.402
自分が正しいと思うことはそのとおりにする	0.143	0.202	0.221	0.647
今の自分は何でもできると思う	0.097	0.079	0.272	0.520
親や先生にいわれなくても自分で進んでやることができる	0.045	0.010	0.211	0.426
夢中になれる、うちこめることがある	0.153	0.301	0.308	0.407
夜ねるときは電気を消し、暗くしてねること	0.186	0.253	0.053	0.116
真っ暗やみ（家の中や外）でこわい思いをしたこと	0.167	0.223	0.032	0.143
いざとなるとどうしても親・先生・友達をたよってしまう	-0.045	-0.022	0.043	-0.024
将来（しょうらい）の夢をもっている	0.094	0.123	0.233	0.309
因子寄与（因子分散）	2.554	2.002	1.962	1.910

因子相関行列				
第1因子	1			
第2因子	0.451	1		
第3因子	0.023	0.114	1	
第4因子	0.207	0.251	0.507	1

2. 全体的因子分析の因子スコアによる男女別、学年別比較の結果

「自然の中、戸外の暗闇体験」の因子（第1因子）、「家の中、屋内の暗闇体験」の因子（第2因子）、「生活充実感の因子」（第3因子）、「自主、自立性の因子」（第4因子）について、その因子スコアを個人ごとに算出し、男女別、学年別にグループ別の平均値を検討した。独立な2群である性別についてはt検定を、また4、5、6学年の3群の平均値については、まず最初に、一元配置分散分析を施して群間の差の全体的有意差を検討し、そのあと多重比較による検定を施した。

表3に示すとおり、男女別のt検定では、第1因子、第2因子の暗闇体験については、男児の平均スコアが大きく有意な差が認められた。第3因子、第4因子については認められなかった。

表4は分散分析による因子スコアの学年要因の検定、因子スコアの学年差の多重比較検定

（Bonferroniの方式による）を示した。

学年別分散分析では、第2因子は有意な差は認められなかった。第1因子「自然の中、戸外の暗闇体験」では、4年生<5年生<6年生と学年進行とともに有意に高く、第3因子「生活充実感の因子」では、4年生>5年生>6年生と低学年の方が有意に高い。また、第4因子「自主、自立性の因子」は、5年生<6年生<4年生と4年生の方が有意に高い。暗闇体験、生活充実感、それに伴う自主・自立性は4年生におおむね高い評価が認められた。

3. 正準相関分析の結果

正準相関分析の結果は、表5-1の正準相関分析が示すように二つの正準相関係数が有意で、第一正準相関係数は.314、第二正準相関係数は.196となり2次元解が得られた。

表5-2は正準相関分析の構造係数を示すものである。構造係数行列の軸1(1次元)を取り上げ、

表 3 因子スコアの男女差 (t-検定)

		平均値	標準偏差		t 値	自由度	有意確率
第 1 因子スコア	男	0.183	0.996	男>女	7.089	1196	0.000***
	女	-0.184	0.784				
第 2 因子スコア	男	0.124	0.87	男>女	5.098	1196	0.000***
	女	-0.124	0.813				
第 3 因子スコア	男	-0.041	0.915	男<女	-1.604	1196	0.109 n. s.
	女	0.041	0.864				
第 4 因子スコア	男	0.004	0.898	男>女	0.172	1196	0.864 n. s.
	女	-0.004	0.766				

*** : p<0.001 n. s. : 有意差なし

表 4 分散分析による因子スコアの学年要因の検定

	多重比較検定		平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
第 1 因子スコア	4 年生<5 年生<6 年生	グループ間	11.15	2	5.576	6.730	0.001**
	グループ内		990.23	1195	0.829		
第 2 因子スコア	4 年生<6 年生<5 年生	グループ間	1.37	2	0.687	0.949	0.387 n. s.
	グループ内		865.23	1195	0.724		
第 3 因子スコア	6 年生<5 年生<4 年生	グループ間	11.16	2	5.579	7.101	0.001**
	グループ内		938.85	1195	0.786		
第 4 因子スコア	5 年生<6 年生<4 年生	グループ間	15.77	2	7.884	11.529	0.000**
	グループ内		817.19	1195	0.684		

* : p<0.05, ** : p<0.01, n. s. : 有意差なし

説明変数群の 10 項目を見るといずれもかなり高い係数を示している。「夜ねるときは電気をけし、暗くしてねる」の変数が.328 とやや低い値であるが、そのほかはおよそ.400 より大きい値である。

それに対して、目的変数群の 10 項目では、「毎日が面白く、すぐに夜になると思う」(.479), 「将来の夢をもっている」(.372), 「夢中になれる, 打ち込めることがある」(.766), 「自分が正しいと思うことは、そのとおりにやる」(.550), などにウェイトが大きく、これらの変数群が対応していることが意味を持っている。すなわち、いろいろな暗闇体験は全体として、生活充実感や自主・自立性の高さと対応・関連しているのである。これらの項目は結果的に因子分析の第 3, 第 4 因子の混じったものになっている。

第 2 軸 (2 次元) の方は、「電気を消して暗くして寝る」(-.622), 「暗闇で怖い思いをした」(.644) のウェイトが説明変数群では係数が大きく、目的変数群では、「いざとなるとどうしても親, 先生, 友達を頼ってしまう」(.933) が、そしてまた、「毎日の生活がたいくつで面白くない」(.304) という

2 つの項目と対応・関連していることがわかる。符号のマイナスを考慮すると、体験は暗闇の怖さを避ける行動のように取れるので、そのことが自立性のない、依存的な態度、生活充実感のなさなどの特性に対応したネガティブな側面を表しているようである。

以上のような正準相関分析の結果から、研究の初期に明示的に設定できなかった暗闇体験のもつ、生活充実感やそれらから養成される自主・自立性という、子どもたちへの心理的効果に関する全体的な仮説が明らかにされたといえる。

4. 統計的因果モデル図の構成

子どもの暗闇体験、生活充実感の因子分析や正準相関分析の結果から、いままで記述してきたところを総合的にまとめるために、原因結果の統計モデルとして、構造方程式モデルによる解析を試みた。その結果、適合度の適切さの基準により、記述的にも、推測統計的にも極めて適合度が高いことが図 1 のように各種インデックスで確認できるので、暗闇体験、生活充実感が子どもたちの

表 5-1 正準相関分析

	固有値	正準相関係数	ウィルクスのラムダ	χ^2 値	自由度	p 値
第 1 正準相関	0.098	0.314	0.814	243.6	100	0.000
第 2 正準相関	0.038	0.196	0.903	121.6	81	0.002

表 5-2 正準相関分析 構造係数

	1 次元	2 次元
[説明変数群]		
夜の墓場などをだれかといっしょに歩いたこと	0.447	-0.180
森や山の暗闇の中をだれかといっしょに歩いたこと	0.477	-0.129
森や山の暗闇の中で静けさ（シーン）を感じたこと	0.596	0.013
森や山の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと	0.505	-0.206
「きもだめし」をやったこと	0.516	-0.280
家の中の暗闇で虫の声、風の音、雨の音を聞いたこと	0.514	0.182
夜ねるときは電気を消し、暗くしてねること	0.328	-0.622
押入れ、物置、蔵の中で暗闇を体験したこと	0.648	-0.093
ふとんを頭からかぶって暗闇を体験したこと	0.760	0.014
真っ暗やみ（家の中や外）でこわい思いをしたこと	0.397	0.644
[目的変数群]		
毎日がおもしろく、すぐ夜になると思う	0.479	-0.041
今の自分は何でもできると思う	0.263	-0.103
いつでも友達と仲良くできる	0.218	-0.158
将来の夢をもっている	0.372	0.019
毎日の生活が楽しいと思う	0.105	-0.041
いざとなるとどうしても親・先生・友達をたよってしまう	-0.073	0.933
親や先生にいわれなくても自分で進んでやることができる	0.043	0.032
毎日の生活がたいくつでおもしろくないと思う	0.106	0.304
夢中になれる、うちこめることがある	0.766	0.042
自分が正しいと思うことはそのとおりにやる	0.550	0.006

自主・自立性に一定の関連をもっているとの仮説はある程度実証されたといえよう。因果係数（影響係数）の有意性の検定は図の矢印の位置に記述されている。

図 1 に示すとおり、最終的従属変数であると見做した子どもたちの自主・自立性の因子の分散の説明率として、暗闇体験、生活充実感の因子が全体として 26% くらい貢献していることがわかった。すなわち構成概念 F4 に対する分散説明率（決定係数）は、攪乱因子 d2 の影響係数が.859 なので、 $1 - .859^2 = .262$ となった。

要因の構造としては、因子分析の結果から F1～F4 の因子が得られ、最終的に F4 を規定するのは「自然の中、戸外の暗闇体験因子」(.154, $p < .01$) と「生活充実感の因子」(.481, $p < .01$) であるが「生活充実感因子」の規定度の方が高く、この因子はまた「家の中、屋内の暗闇体験因子」の影響を

かなり弱いものであるが受けている (.065, $p < .10$) ことなどが見いだされた。

IV 考 察

暗闇体験は男児の方が体験度が高く、比較的暗闇を好意的に受け取っている。女兒は暗闇に対して否定的に感じていることから、人工的な暗闇のみ体験していると考えられる。また、暗闇体験は学年があがるほど体験度は高く、生活充実感、自主・自立性については 4 年生が優位に高い。このことから 4 年生の時期に様々な実体験が必要であると考えられる。

暗闇は大人にとっても無気味なもの、忌み嫌うものであるが、長野の善光寺お戒壇めぐり、清水寺随求堂の胎内めぐり、などの暗闇での体験は大人にとっても興味ある体験である。

図1 暗闇体験と心理変数の統計的因果モデル

適合度: GFI=.981, AGFI=.968, RMR=.040, RMSEA=.042

k1~k10は暗闇体験の内容項目, s1~s10は生活充実感の内容項目,

e: 測定変数の誤差, d: 潜在変数の攪乱因子

子どもにとって暗いところとは、恐ろしい、気味悪いところである。しかし、子どもたちは年を経るにしたがって、怖さに加えてそれを面白がろうとする思いも加わってくる。それは暗闇という客観的には何も見えない状況においても、そこに何かを見出そうとする、そのことが子どもにおいては好奇心に繋がるのである。子どもの好奇心は、興味とならんで教育の出発点としての子どもの自発性の原理を形成する源泉となり、さらにまた、この体験は長じて知的好奇心の発展の源泉ともなる。

自然体験の中の感覚的体験は感覚器を刺激し、直接感覚に働きかける。とりわけ暗闇体験は、触覚をはじめとして視覚・聴覚・嗅覚・味覚といった5感を研ぎ澄ましていなければならない。この感覚が生きて働く子どもたちは、好奇心旺盛でイキイキと行動する。このような子どもの好奇心(興味・関心)、想像力を育むことのできる1要因として暗闇体験があり、その体験から得た好奇心が自発性の源泉として、自主・自立性を育むので

ある。

暗闇体験、生活充実感、子どもたちの自主・自立性の因子に対して、その因子分散の約26%、つまり1/4の決定係数にしかない。残り3/4は他のさまざまな要因、たとえば、学校教育、家庭教育、子ども同士のコミュニケーション、いろいろなタイプの大人たちからの影響なども研究対象として取り入れていかなければならないことは当然のことである。子どもたちが、「自然の中、戸外での暗闇体験」、「家の中、屋内の暗闇体験」など日常生活の中で、さまざまな体験ができる機会を与える必要があることの根拠が得られたことになる。鈴木(2007)による、「実体験を通して、自尊心を高めるためには子どもをほめる機会が必要である」ことも考えれば、身近にいる大人と共に暗闇の中での様々な体験を実感し、その体験・経験についての話し合いを学校で、家庭で行うことにより、教育的効果が得られるのではないかと期待される。

V 結 論

暗闇体験, 特に, 自然の中におけるそれは生活充実感と関連しながら, 子どもたちの自主・自立性の養成に少なからず貢献できると示された。

都市生活の24時間化が進んでいる現代社会において, 子どもたちの家庭生活, 学校生活の中で暗闇体験を意図的, 計画的に取り入れ, 体験させることを奨励したい。暗闇体験による闇の中での好奇心はじめ, 視覚, 聴覚, 嗅覚, 触覚, 味覚の五感覚器への影響をもつことを考慮すれば, 外界への適応力がある感性豊かな子どもの成長が期待できる。また, 好奇心のめばえにより, 日常生活の中での意欲的・積極的行動, さらに学習に対する意欲や積極性, 自主・自立性をのばし, 子どもの生きる力を育む良い機会と捉えられる。なぜならば, 実体的自然環境との相互作用の体験の中でしか適応能力の増進はもたらせないからである。

今回は暗闇体験の効果のみを扱ったのであるが, 結果的に生活充実感が自主・自立性に関連する1要因であることが確認できた。遊びや自然体験が子どもの社会性, 道具操作, 一人行動, 協調性などに及ぼす影響については, すでに図1のような構造方程式モデル(本間, 2007)で確認され, ある程度の影響をもっていることが見出されているので, 今後とも子どもの成長発達に資する諸要因を漸次取り上げて, 全体像を構築していくことを課題としたい。

謝 辞

本研究を進めるにあたり, データ解析に目白大学大学院心理研究科の上笹恒教授(客員教授)に多大な協力をいただいた。ここに感謝を表す。

文 献

千野貞子, 鈴木義一郎, 沢田利夫, 白相岳夫, 南条義治, 我妻貢(1989)自然体験による子供の心の教

育効果に関する統計的研究, 統計数理研究所研究レポート, 67

堀 洋道, 山本真理子, 松井 豊(1994)心理尺度ファイル—人間と社会を測る—, 垣内出版, 209-212

本間玖美子(2001)幼児期における自然体験について—都市部の幼児を対象とする調査から—, 女子教育, 24, 9-26

本間玖美子(2002)自然体験の概念上の問題について, 目白学園女子短期大学研究紀要, 39, 91-99

本間玖美子(2005)短期大学生の暗闇体験に関する研究, 目白大学短期大学部研究紀要, 42, 81-89

本間玖美子(2007)子どもの自立に関わる遊びと自然体験—自立性の規定要因の統計的因果モデル—, 日本健康行動科学会誌, 5, 37-44

本間玖美子, 塩嶋理恵(2003)子どもの自然体験について—体験内容の捉え方—, 目白大学短期大学部研究紀要, 40, 101-115

本間玖美子, 塩嶋理恵(2004)子どもの自然体験と社会生活能力の関わり, 目白大学短期大学部研究紀要, 41, 71-85

本間玖美子, 上笹 恒, 松川秀樹, 宇田川香織, 北野江利子, 山田隆信, 原 聡介(2008)子どもの遊び体験と子どもの自立行動について, 人と教育, 2, 23-57

仙田 満(1999)子どもとあそび, 岩波新書, 55

鈴木知美(2007)小学生のほめられ体験とセルフエスティームとの関連, 目白大学大学院心理学研究科修士論文

竹中菜苗(2005)暗闇への探求—そこで失われるものともたらされるもの—京都大学大学院教育研究科紀要, 52, 200-212

(受付:2008年10月14日 受理:2010年2月1日)

本間 玖美子(ほんま くみこ)

現職: 目白大学人間学部子ども学科教授

幼児体育, 保育内容「身体表現」, 子どもと生活, 生涯スポーツなどを担当。

子どもの自然体験を中心に, 子どもの自主・自立に関わる諸要因について研究している。

主な著書:「CD付き みんなで楽しい手遊び」(監修, 日本文芸社), 「保育用語辞典」(共著, 一藝社)ほか。